月見草

水野葉舟

青空文庫

馬車が深い渓流に沿った懸崖の上を走っていた。はるかの底の方に水の音がする。崖の地肌には雪に、灰色の曇った空がうつって、どことなく薄黒い。疎林がその崖に死んだように立っている。

その中に、馬車の轍の跡だけが、泥に染んでいる。私はいま、東北の或る田舎を旅をしているのだが、この地方では、三月の半ば過ぎていると言うのに、まだ空は雪催いだ。

私は馬車の窓に倚りかかって、この目馴れない景色を見いっていた。道には人気も無かった。

馬車の中でも、もう皆くたびれていると見えて、誰も口を噤んでいた。ただ馬車が、危い道を揺り上げ、揺り上げ駆けていた。

私は目も疲れた。——からだは今朝から長いあいだ、窮屈な態をしているので、方々が痛い。——その疲れた目を、力なく後に残り続いて行く道の上に落とした。見るとなしに道が目にはいっていた。

すると、その道の両側に、ごまの実そっくりな形をした、実がはじけてついている草の枯れたのが、つづいて立っているのを見た。

「やまごま」、そんな名の草のあることを聞いたように覚えている、この珍らしい雪国に来たのだ。或いはその草かもしれぬと、私は故もなく思った。

崖の道は山にはいった。水の流れも聞こえなくなった。そしてとうとう雪が降り出した。

それから二時間ばかりして、もう日が暮れかかった。馬車の中はいよいよ無聊だ。中の人のあいだで又思い出したようにそろそろ話がはじまった。

その中に私もはいった。やがて、向い合って坐っていた老人に、

「今来た道に、ごまのような草がありましたが、何でしょう。山ごまと言うのではありませんかね。」

「山ごま？　そんなものは知りませんが、何だろな、ごまのような、草って……」

「種がたくさんついたまま、枯れていたのです。」

「あ、あれは月見草。」

「月見草、そうですか。」

私はそれでこの、無聊なうちに、せっかく踊って来た好奇心も、何もすっかり消えてしまった。また、手のやり場もない、無聊を感じながら馬車の垂幕をおろしてしまった。

しばらくすると、老人がこういった。

「あの草はつい明治二十三年の洪水までここらになかったのです。」

「……」

「この奥に、早池峯山という山が、その地図にもありましょう？」と、私の手に持っていた地図に目をやった。私はそれに連れて、老人の顔を見ていた目を地図の上に落とした。

「はやちね。この早池峯と書いてある山ですね。ええ。」と私は老人に話の先きを促がした。

「いいえ、その早池峯の裾の平にね、蜜蜂を飼うと言って種を播いたのです。ところが二十三年の洪水の時に、そこがすっかり流れてしまった。すると、この猿ヶ石の河岸一帯に、どうして広がったものか、月見草が咲き出したのです。それから年々殖えて行く。」

「おもしろい話ですね。」と私は心底から言った。

そして、今まで自分の目に見えていた、草の枯れた姿を思い浮かべて、生きた人の運命を思うように、その草の、亡びなかったのを

祝した。

青空文庫情報

底本：「遠野へ」葉舟会
　　1987（昭和62）年4月25日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：林　幸雄
校正：今井忠夫
2004年2月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月見草

水野葉舟

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/